

# 森の心

## 第7部 佐鳴湖

4

「うわっ、すごく汚いよ」

九月下旬に、佐鳴湖ネットワ  
ーク会議が流域河川など約百三  
十カ所を実施した水質調査。湖  
に流れ込む段子川の上流約八  
でCOD(化学的酸素要求量)  
を測った浜松市西島町の大学生  
坂倉寛子さん(三)が、驚きの声  
を上げた。手にした簡易試験紙  
には、最も汚れたレベルの「水  
色」よりはるかに濃い青色が出  
ていた。

県は一九九〇年度から佐鳴湖  
浄化に本腰を入れ、二〇〇〇年  
度までの十年間、約六十億円

### 二重構造

かけ湖底の汚泥約五十万立方  
を除去した。今も下流河川でし  
ゆんせつ作業が進み、上流では  
〇六年度中に水質浄化の新たな  
実験施設を造る計画だ。しか  
し、湖内ではリンの数値こそ  
半減したが、CODは横ばいの  
まま。

一方、浜松市では流域の下水  
道整備を進めてきた。実質利用  
率は76%(〇五年度末)。この  
間、西岸の区画整理事業で新川  
放水路ができ、下水道整備が遅  
れた下流部の生活排水が逆流し  
て、浜名湖岸のごみも漂着す  
ようになった。

上下流の九河川や浜名湖もか  
らむ複雑な水の流れが行政を翻  
弄(ほんろう)している。

# 県と市対策そろわず

浜松市は来年四月の政令市移  
行にあたり現在、県が管理する  
二十九の二級河川の権限移譲を  
選んできた。佐鳴湖も行政区分  
では二級河川「新川」の一部  
だ。しかし、市は昨年、二十九  
のうち段子川など四河川だけ移  
譲を受けることを決定した。新  
川の名はその中に入らない。市  
課では「将来的に(移譲を)検  
討するかもしれないが、県の事  
業が継続中で今回は見送った」  
と理解を求めるが、県と市とい  
う河川行政の「二重構造」は残  
された。湖内の魚類調査にもか  
かるのは、長野県諏訪市など六市  
町村にまたがり、面積が佐鳴湖  
の十一倍ある諏訪湖だ。



段子川支流で水質を調べる佐鳴湖ネット  
ワーク会議の会員らー浜松市初生町で

四百万立方メートルの汚泥を除去し  
た。併せて、下水道の整備に努  
めた結果、実質利用率で91%に  
まで普及。さらに、コンクリー  
ト護岸にヨシを植えるなどの  
自然護岸化も図ってきた。こう  
した結果、三十年前に今の佐鳴  
湖に近い10だったCODは現  
在、6以下。「ドイツなどの先  
進事例を参考に進めてきたが、  
今もさらに有効な手段を探っ  
ている段階」(同県諏訪湖事務  
所)だ。

一方の佐鳴湖。市民団体や  
企業の連携を目的とした佐鳴湖  
ネットワーク会議が昨年、県の  
肝いりで発足した。しかし、湖  
岸で会った地元・富塚地区の自  
治会幹部は「周辺の開発が一段  
落するのを待ったのではない  
か。諏訪湖と比べると、あまり  
にも遅すぎた」と冷ややかだ。  
脱ワーストへ、人口八十万都市  
・浜松のシンボルともいえる佐  
鳴湖の、浄化のプロセスはまだ  
見えてこない。



この連載へのご意見をお寄せ下さ  
い。あて先は〒433 8503 浜  
松市柴新町45、中日新聞東海本社報  
道部「森と水と人」取材班。ファ  
クス053(422)5218、電子  
メールshiken@chunichi.co.jp

中日新聞 浜松発行  
25  
いつでも、地域と共に

# 森のついで

## 第7部 佐鳴湖

5

佐鳴湖から東へ徒歩十分の距離にある縄文時代の蜆(しじみ)塚遺跡。ここで出土した貝類の大半は、海水と淡水が交じる汽水域に生きるヤマトシジミだった。昭和三十年代には湖岸で、潮干狩りを楽しむ家族の姿が見られたが、水質悪化でその風景も消えた。

「佐鳴湖の水質が改善しないのは、食物連鎖が繋がっていないから。シジミをその輪の中にに入れてやれば縄文時代の湖に近づけられるはず」

二〇〇二年からシジミを使った実験を続ける市民グループ「縄文倶楽部」の代表、鈴木清子さん(左)＝浜松市大原町＝は、湖岸の仮設のポリタンクで生息状況を確認しながらその話した。

富栄養化の原因とされるリンや窒素。植物プランクトンはその吸収・除去に役立つが、死

### 食物連鎖

だものがそのまま沈んで汚泥化し、悪循環を生んでいる。そこでプランクトンを食べるシジミが増えれば一気に水質改善が進む。というのが鈴木さんたちの考えだ。シジミの親貝一個が一日水を吸って吐くことで十層を浄化するとのデータもあり、実際、採取した湖水にシジミを入れると一時間程度で澄んでくる。

◇ だが、実験は必ずしも順調というわけではない。

浜名湖を通じてつながる都田川でヤマトシジミを採取し、佐鳴湖岸の八カ所ほどで繁殖を試みたが、生き続けられたのは北部の四カ所だけ。七月には産卵

佐鳴湖岸に沈めたポリタンクでシジミの成育を確認する鈴木清子さん＝浜松市富塚町で



# シジミ復活実験続く

実験を行ったが、受精は確認できなかった。

鈴木さんは、佐鳴湖の湖底の状態に着目する。

「食べ物は豊富でも砂がない。シジミの『住む家』がないんですよ」

一般に、公共工事による湖岸整備では、湖底の汚泥が浮き上がるのを防ぐため、湖岸に大きめの砕石を敷き詰める。長年、工事が繰り返されてきた佐鳴湖には、シジミが好む砂地の残る場所は限られている。メンバーの村上美代子さん(左)＝同市細江町＝も「行政はしゅんせつや湖岸工事の当時、シジミの復活なんて考えてなかったはず。このままでは食物連鎖の輪ができず、汚泥がたまる一方。湖底を少しでも砂の状態に戻してほしいんです」と訴える。

県は水質浄化の一環で、同じようにリンなどを取り込むヨシが担当しました。

「シジミが全滅後に復活できるところは全国にもない。成功すれば、佐鳴湖の水質ファースト脱却へ大きな弾みになるはず」。そう話すのは、やはり佐鳴湖の水質調査やシジミの研究に生徒と取り組む浜松北高教諭の辻野兼範さん(左)。まだ始まったばかりのシジミプロジェクトだが、輪に加わる人々の夢は湖岸に広がっている。

◇ 終わ

県は水質浄化の一環で、同じようにリンなどを取り込むヨシが担当しました。

この連載への意見をお寄せ下さい。あて先は〒430-0505 浜松市業新町45、中日新聞東海本社報道部「森と水と人」取材班。ファクス053(421)5218、電子メールrikken@chunichi.co.jp